

●キンジャサの奇跡

二学期が始まって私の魂は抜け殻のような状態が続いていた。人生そのものの目的や生きる希望が見えなくなっていた。医者という明確な目標も、梁先生の後押しが無くなり、風前の灯のごとく立ち消えそうになっていた。梁先生との数々の会話が、耳にこだましては「これでは梁先生に顔向けできない…。先生に医学部合格の報告が出来なかったらどうするのだ」と自分を鼓舞しても、空転するばかりの日々が続いた。バイタリティー溢れる梁先生ただ一人、人の命の儚さだけが浮き彫りに脳裏に刻まれ、私の中の時間が止まった。そんな日々を過ごしながら秋も深まる頃、ビッグニュースが飛び込んできた。私が小学生の頃から尊敬し、憧れて止まないボクサーの[モハメッド・アリ]が、アフリカのザイールで、チャンピオンのジョージ・フォアマンと戦うというのだ。格闘好きな私は、ことボクシングと言えば、ヘビー級のタイトルマッチは外せない神聖なイベントであり、特にモハメッド・アリは、カシアス・クレイ時代からの熱狂的ファンだったので、このニュースに胸が高鳴った。当時の私はファンというよりアリ信者に近い状況だったかも知れない。彼のボクシングスタイルや強さも魅力だが、彼の哲学そのものと生き様にシビレ、尊敬して止まなかったのだ。なにせ、彼はたった一人で冷戦と戦った男といっても良いくらい、時代に翻弄されず、カネ、名誉、栄光の全てを捨ててでも、自分の信念に従って、ベトナム戦争への徴兵を拒否してチャンピオンベルトを剥奪された無敗のチャンピオンだったのだから、22歳で世紀の番狂わせと言われたソニー・リスト戦を予告通り倒し、リターンマッチも一瞬でKO勝ちに収め、名実ともにチャンピオンロードを歩もうとしていた矢先に、アメリカ政府にベトナム戦争への批判と徴兵拒否で、全てを奪われてしまったのだ。世間や政府を相手に、堂々と一人で戦い、やがては反戦運動のシンボリック存在に昇華して、最後には最高裁判で勝訴して、ボクシング界に復帰し、再度チャンピオンに返り咲こうとタイトルマッチの権利を得て戦うというのだ。チャンピオン剥奪から3年7か月のブランクを経て、更に32歳の、さすがに全盛期を過ぎたアリの下馬評は芳しくなかったが、当時のチャンピオンのジョージ・フォアマンの圧倒的な強さがばかりが目立ち、私も内心「アリも万に負ければ引退かな…」なんて不安になっていた。しかし、いよいよ決戦の10月30日は生涯決して忘れられない日になった。

当時のボクシング興行最高額でのアリVSフォアマンのタイトルマッチは、ファイトマネーが破格すぎてアメリカでも成立せずに、アフリカのザイール共和国の独裁大統領を巻き込んで、ドン・キングによるプロモートでやっと成立したぐらいのビッグマッチだった。この日は学校を休み、私は一人衛星中継されるテレビの前で釘付けになり、手に汗握りながらパンチの応酬を繰り広げるたびに、絶叫しながらアリを応援し続けていた。ロープに追い詰められながら、フォアマンの強打を浴びるたびにアリは隙を伺うように身をかわし、カウンターを返し、フォアマンの強打をかわしていた。そして8ラウンドになって、打ち疲れたフォアマンの一瞬の隙をみて、一瞬にして連打で顎を砕きフォアマンをマットに沈めたのだ。まるでスローモーションのように今でもこのダウンシーンは目に焼き付いている。私は歓喜の雄叫びをあげ、泣きながら家中を飛び回っていた。実に7年ぶりにアリがチャンピオンに返り咲いたのだ。感動と興奮が冷めやらぬまま、私は全身に鳥肌を立てながら、この瞬間に何かを感じたのだ。アリは、本当にやってのけたのだ。人々はこの試合を『キンジャサの奇跡』と称したが、彼は生涯三度のチャンピオンに返り咲き、19度の防衛を果たし、そしてボクシングのみならず社会運動にも精を出し、何よりも「不可能なんて無い」を、有言実行した私の憧れのヒーローなのだ。

この日の瞬間から、私のモハメッド・アリ教は絶大なものになり、「不可能なんてありえない」というアリの生き様に従うかのよう「可能思考」に、私の脳全てのパラダイムがシフトされたのだ。モハメッド・アリは2016年、6月3日、74歳で逝去した。そのニュースは全世界を駆け巡り、アメリカ元大統領のバラク・オバマが大統領執務室から声明を出した。



「モハメッド・アリは世界を揺るがし世界をより良い方向へと変えた」そして、黒人差別の公民権運動の先駆けともなったアリの社会運動を称え、最も偉大な男だった。それ以外に表現のしようがない」と言わしめた。オバマ大統領が執務室近く（書斎にアリのソニー・リスト戦の写真を飾りアリのグローブを置き、アリへの追悼の言葉と共にツイートしたのは余りに有名だ。

[以下はローリングストーン誌からの引用部分…] オバマ大統領はさらに続けた。彼はかつてこう言った。俺がアメリカだ。認めないかもしれないが俺は皆の味方だ。黒人で、自信家で、ぬぼれ屋の俺を受け入れてみる。俺には俺の名前があり、宗教があり、目標がある。俺のやり方を受け入れろ”と。私は成長するにつれ、アリの本来の姿を理解できるようになった。アリはリング上のファイターとしてだけでなく、世の中の正しいことのために闘った。彼は我々のために闘ったのだ」彼は厳しい時代の中、キング牧師やネルソン・マンデラらと共に行動を起こし、誰も言い出せなかったことを代弁した。彼のリング外での闘いのせいでタイトルを剥奪され、世間的な立場を失ったこともあった。あらゆる方面に敵を作り罵られ、刑務所送りされそうにすらなった。しかしアリは自分の信念を貫いた。そして、我々が生きる今の自由なアメリカは彼の貢献による所が大きい」民主党の大統領候補ヒラリー・クリントンと、その夫で元大統領のビル・クリントンも「アリのよう美しく優雅で速く強いボクサーは二度と現れないだろう」との声明を出した。ビル・クリントンは大統領時代、ホワイトハウスでアリに大統領市民勲章を授与している。オバマ大統領は「アリは世界を揺るがし、世界をより良い方向へと変えた。ミシェルと私は彼の家族に深い哀悼の意を表すると共に偉大なファイターの冥福を祈る」と追悼のコメントを締めくくった。

[以上ローリングストーン誌からの引用抜粋] 黒人初のアメリカ大統領になったオバマ大統領の心の師も、モハメッド・アリだったかも知れない。アリは信念の先駆者であり、自由の旗手なのである。私もマイノリティーとしてアリの勇気と生き様には、幼い頃から共鳴してきた。彼の勇気に心底憧れていた。差別されても、隷属の名前のカシアス・クレイは捨ててモハメッド・アリに改名する」と最初に世界チャンピオンになった時に宣言し、黒人差別と闘い、反戦運動の先駆けとなり、自分のアイデンティティーを誇りに、信念を貫き、剥奪されたボクシングの全てを、アリは自分の力で再度すべてを取り戻したのだ。

このキンジャサの奇跡の一部始終を見届けた私は、万感の思いでアリの姿を、未来の自分に置き換えていた。アリは常日頃言っているのではないか。「不可能なんてありえない」とまさに有言実行するアリは、しかもそのスケールの大きさややってのける偉業の数々から、



私のヒーローになり、師となり、今日でもいろんな場面で私を奮い立たせてくれる。この春、私は10万人に5人の発症率の[多発性骨髄腫]と診断された時も、闘病を続ける今も、心にはモハメッド・アリの励ましが響く。アリも引退後は30年もパーキンソン病と闘ってなお社会運動も継続していたではないか…と

『んな時、もしアリだったらどうするだろうか?』と自問し、やってみなくては分からない。不可能なんてありえない』とチャレンジし、困難を突破したことはこれまで数しれず経験した。有言実行する可能思考は、まさにアリ教の真髓だ。私はこのキンジャサの奇跡の日から、梁先生との死別を乗り越え、自我の確立への航路に大きく舵を切り、帆を一杯に広げ、また大海原目掛けて航海を続けることができたのだ…。[次号につづく]

※別れと出逢いが人生を深く彩り、運命を操っていく…。
荒波も風も順風も逆風も、航海するなら…当たり前だ。